



堀内さんと愉しむ四字熟語 第13回



「邯鄲学歩」(かんたんがくほ)

文・写真：堀内 正範(ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長)

苑故典語成鄲邯

田舎育ちの若者が都ぶりを学ぶとしたら渋谷か原宿か青山あたりでしょうか。

北国の燕の田舎から、ひとりの若者が都ぶりの歩き方を学ぼうと、趙の都だった邯鄲にやってきます。しばらく努めてみたもののサマにならない。簡単にはいかな
いものだとあきらめて故郷へ帰ろうとしますが、元の歩き方を忘れて歩けない。そ
こで這うようにして帰るしかなかった。都会にあこがれて出てきて挫折して故郷へ
もどる。もどった故郷でも受け入れられなくなる、という「邯鄲学歩」(『莊子「秋水
篇」』など)のお話です。

「邯鄲学歩」彫像



明代から泌河に架かる「学歩橋」

この「邯鄲学歩」にちなむ「学歩橋」が明の万暦年間(1617年)に石づくりに
直されて400年、いまま市内を流れる泌河に架かって用いられています。

中原の古都邯鄲にちなむ成語は1584条とか。それぞれに歴史的故事や伝
説があって、独特の文化貢献をしているということで、「成語典故之都」という
称号が2005年10月に中国民間文芸家協会から授与されています。市内に
「成語典故苑」や「趙苑」を設けて、成語を彫像や碑文にして展覧しています。

邯鄲生まれの成語のうち、みなさんにも親しいいくつかを取り上げますと――

「黄粱一夢」(邯鄲之夢・一枕黄粱とも。廬生が道士呂洞賓から与えられた枕をして一生涯の夢をみて目覚めたが、黄
粱はまだ煮えていなかった)、「完璧帰趙」(秦に盗いた蔣相如が和氏の璧を無事に持ち帰る。完璧の語源)、「刎頸之
交」(蔣相如と廉頗によるお互い命をかけた交わり)、「背水一戦」(背水之陣とも。漢の韓信が趙と闘ったとき河を背にし
て兵の退路を断ち死力を尽くして勝利した)。

雅楽「蘭陵王入陣曲」は北齊時代の蘭陵武王高長恭(573年服毒自死)にちなむ曲目です。市郊外磁県にある蘭陵
王墓の前で、1992年9月に奈良大学と南都楽所の雅楽団が「陵王の舞」を演じました。1400年を隔てての「秘曲帰
趙」として話題になりました。

堀内さんと愉しむ四字熟語

明日黄花

みょうにちこうか



宋代には園芸種も育成され『菊譜』が出版された

文・写真：堀内 正範(ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長)

菊に舞う蝶は秋の愁いを伝える

春の花は「百花繚乱」といわれるほどに多彩ですが、秋の花といえば菊。ここの「黄花」も菊のこと。「明日」というのは、重陽節（旧暦9月9日）が過ぎたあとのこと。重陽節には菊をめでるならわしがあって、その日に合わせて花の盛りを迎えるよう栽培されるようです。

ですから「明日黄花蝶也愁」（蘇軾「九日次韻王鞏」から）は、重陽節を過ぎて菊の花が凋零に向かい、それを知る自分も蝶も愁えているというのが、本来の意味合いです。蘇軾の愁いで詩的な味わいがある成語として成り立っているのですが、後には単に過ぎ去った事物をいうようになりました。

「重陽」はご存じのように「陽数」（奇数）の9が重なることから。重陽節はいま中国では「老年節（敬老の日）」に当てられています。高齢化率20・6%の上海では10月は「敬老月」で、敬老・愛老・助老といった「崇尚敬老」行事がさかんです。

日本では平安時代に宮廷行事に採り入れられ、菊花を觀賞したり長寿の効能がいわれて菊酒が嗜われました。いまでも「菊祭り」が各地で催され、「笠間の菊祭り」

（第110回・10月21日～11月26日）が有名です。華道ではこの日は菊のみで生花を活けます。



各地の品評会では三段仕立てや菊人形が展示される



「明日」は過ぎ去ったことをいうにはふさわしくないというので、最近「昨日黄花」が成語として使われています。米ドルの国際的な力がいまや落ち目というときには「昨日黄花」のほうがニュアンスが伝わるというわけです。

女子バレーで日本が中国を破り金星を挙げると、中国では「明日黄花」の評を受けたりします。いまは「百花斉放」といっていいほど使い方も多様で、普及の初めは独占状態だったアップルの商品が売れなくなるのも、金融中枢の香港も、空気汚染で石油も、動物愛護で毛皮も、めんどろな現金決済も、みんな「明日黄花」です。

気がつけばことは旧暦に閏五月があったので、重陽節は10月28日。この稿も「明日黄花」にならずにすみました。

蘇軾（東坡）は北宋を代表する政治家、詩人。

火樹銀花

かじゅぎんか

文・写真：堀内 正範(ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長)

冬の夜を明るく暖かくする「火樹銀花」（唐・蘇味道「正月十五夜」など）というのは、なにやら現代の大都市のイルミネーションを先取りしたような成語です。クリスマス（聖誕節）、新年、そして「春節」とくに「元宵節」にはライトアップして、「夜景亮化」を競っています。

「火樹」は樹上に紅い灯火を掛けつないだ情景、「銀花」は銀色に輝く花。今なら打ち上げ花火の銀色の火輪の花がピッタリですが、上古の詩人は「銀花」にどんな情景を託したのでしょうか。月明かりで輝いている雪の情景でしょうか。蘇味道は上の詩に「明月逐人来」の句を継ぎ、李商隱は「月色灯山滿帝都」と月光と灯火を合わせて詠じています。



↑各地の「火樹銀花」 左から広東・香江、大連市、河北・蔚県

日月が同時に昇って沈む「春節」（初一、新月）から三日月となり半月となり凸月となって十五夜を迎えます。この年初の満月を待って湯圓（湯元、元宵とも。南北・地方で異なりますが、ゴマや穀物のタネなどを包んだだんご）で祝って過ごすのが「元宵節」です。

この夜、農民は戸々に夜どおし明かりを灯して今年も豊作であるように、無病息災であるように、そして子宝がさずかるようになどを満月に祈るのです。大地が温もる「春回大地」を前にして、ここから農作業に精を出し、八月十五日には粒々辛苦して得た収穫物を「中秋名月」に供えて豊作のお礼をし、月餅をいただけるようにと願うのです。



「長崎ランタンフェスティバル」
春節から元宵節まで、新地中華街を中心に1万数千個のランタンや点灯式オブジェが飾られます

外はなお骨を刺すような寒気の中の「観灯」で、農民は豊作を祈り、皇帝は都で万民の幸せを祈ったのでしょう。唐の玄宗の父睿宗のときの「元宵灯節」が最も豪華で、安福門内に20丈の灯輪を建て、燃灯五万盞を掛けたといいます。玄宗も劣らず上陽宮中に広さ20間、高さ150尺の灯楼をつくらせて貴妃とともに鑑賞しています。

日本では「長崎ランタンフェスティバル」が知られ、台湾では「平溪天燈祭」の何万というランタン飛ばしが幻想的な夜を演出して人気になっています。



「平溪天燈祭」（天燈節）
元宵節に夜空に天燈を飛ばして先祖へ平穩無事を告げご加護を祈ります。何万という天燈が空高く昇ってゆく光景は幻想的です



堀内さんと愉しむ四字熟語 第16回

「三春之暉」

さんしゅんしき



文・写真：堀内 正範(ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長)

生み養い育ててくれた母の労苦に子どもはどう報いればいいのだろう。

慈母手中線 遊子身上衣
臨行密密縫 意恐遲遲歸
誰言寸草心 報得三春暉



唐の孟郊の詩「游子吟」から「寸草之心」と「三春之暉」とそれを合わせた「寸草春暉」とが成語となって、1200年ものあいだ親しまれてきました。

「寸草之心」は子どものまだ成長途上の心のこと。「三春之暉」は孟春、仲春、季春の春三カ月の暖かい陽光のこと。母は一人前になって旅に出る子どもが着る衣服（遊子身上の衣）を「立派になって早く帰っておくれ」という思いを込めてひと針ひと針と縫いあげます。そんな母の愛を暖かな「三春之暉」にたとえています。暖かさでこれに過ぎる衣はないでしょう。手中に糸を操っている母の恩にどうやって報いればいいのだろう。この「寸草春暉」の詩を口ずさみながら、中国の子どもたちは自らの出立のことを思うのです。

母への思いを伝えるのが「母の日（母親節）」。日本でも中国でも5月第2日曜日です。先行のアメリカに倣ってカーネーションの花にプレゼントを添えて贈ります。母さんへの思いはどここの国でも同じように広がっています。ただしオーストラリアでは秋ですから菊の花を用いますし、韓国では「父母の日」として5月8日におこなわれています。



みずからが父母の労苦を知るところには父母はすでにいなかった。その恩を思う「哀哀父母」（『詩経「小雅」』から）は古くから伝え継がれてきた成語です。ところがいま史上まれな長寿時代になって、高齢期を過ごす父母が生きているうちに親の恩に報いることが可能になっています。そこで「哀哀父母」をふまえて「愛愛父母」（『日経新聞「NIKKEIプラス1」』）という成語が生まれます。生きているうちに孝行をとという明快さが「愛愛」にあります。「四字熟語」も時代とともに新たな味わいを付加しながら生きつづけていくようです。

堀内さんと愉しむ四字熟語 第17回

「単刀赴会」

たんとうふかい

文・写真：堀内 正範(ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長)



湖北省荊州市関羽公園の関羽像高さ5.8m



文聖孔子のふるさと山東省曲阜をたずねたことのある人は、孔林の奥にねむるその墓塚がさして大きくないことに気づかれたことでしょう。三年の喪に服した弟子たちが傍らから「老師・・・」と声をかければ、やさしく応じてくれそうな距離感にあります。

一方、武聖関公の首塚は、中原の古都洛陽の郊外に設けられています。荊州で呉軍によって討たれたあと、関羽の首級は洛陽にいた曹操のもとに送られ、王侯の礼をもって葬られたといえます。広い関林の奥に蜀将関羽は敵地の魏でねむっているのです。四囲壁によって守られている墓塚は、文聖孔子のそれに似て関公の存在が感じられるほどの大きさです。



洛陽関帝廟墓塚



洛陽・関林→
蜀の武人が
身をやつして
お参りにきました

←神戸・関帝廟

どこの中華街にも「孔子廟」とともに「関帝廟」が祀られていて人びとの尊崇を受けています



そののち孔子廟が孔姓の住民に護られてきたのに対して、関帝廟は歴代王朝の官人と商人によって護られてきました。洛陽の廟域の周辺は大規模な関林市場になっています。おそらく当初は商人に身をやつした蜀の武人の姿もみられたことでしょう。

英傑関羽の豪胆さを伝える四字熟語に「言笑自若」（『三国志「蜀書・関羽伝」』から）があります。あるとき刺さった毒矢の毒を除くため、関羽は名医華佗の手術に左腕をまかせます。血がしたたり盆に溢れる間、関羽は肉をほおばり、酒を飲み、談笑しつづけたといえます。

もうひとつ「単刀赴会」（『三国演义「六六回」』から）は、単身で相手の陣営へ交渉に赴くこと。「関」の字の紅旗をかかげた一艘の船で乗りこんで、腰刀一口を帯びた少数の供に護らせて魯肅との「蜀・呉交渉」に臨んだ関羽の姿を「単刀赴会」と称えています。関羽は魯肅との会合に「単刀」で乗り込み交渉を成功させます。

このひとり赴く「単刀赴会」と激痛に耐える「言笑自若」の関羽を思えば、少々ピンチにあわてることもないでしょう。データや資料をかかえて交渉に赴くとき、難関の試験に立ち向かうとき、このことばが支えてくれるに違いありません。



第18回 堀内さんと愉しむ四字熟語

「三顧茅廬」

さんこぼうろ



文・写真：堀内 正範（ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長）

前は三国時代の英傑関羽を取り上げましたので、
今回は新しい時代を開くために人材を求める劉備の熱意と
それに応える孔明との故事に触れておきましょう

日本では「三顧の礼」といいますが、そのいわれまではよく知られておりません。中国では「三顧茅廬」という四字熟語を用いるので、劉備が諸葛孔明の茅廬（草廬）を三度たずねてやっと会えたという故事が意識されているのです。



劉備は関羽・張飛とともに三たび孔明の住む茅廬（草廬）を訪れます
扉を開いて童子が応対します

漢朝劉氏の末裔として、劉備は関羽と張飛とともに「救困扶危」（『三国演义「第一回」』）に立ち上がったものの、戦場を駆け巡ることもままならず、「脾裏に肉生ず」（ふとももに贅肉がついた）といって嘆いています。チャンスがなくて実力を発揮できないことを「脾肉之嘆」というのはここから。

そんなときに劉備は臥龍孔明のことを知ります。漢水支流の白河に臨む新野にいた劉備は、民を安んじ国に報いるために協力してくれるよう遠路をたずねるのですが、三度目にやっと会うことができました。これが「三顧茅（草）廬」です。孔明はのちに「臣を草廬の中に三顧し、臣に諮るに当世の事を以ってす」（出師表）としたためています。熱く語る劉備の真情に強く共鳴したのでしょう。



孔明が草廬をむすんでいた襄陽古隆中の跡地



襄陽古隆中にある三顧堂

孔明を得てふたりが議論に明け暮れる姿を見て関羽と張飛は面白くありません。それが表に出たのでしょうか。劉備は「われの孔明あるはなお魚の水あるなり。願わくは諸君また言うなかれ」（『三国志・蜀書「諸葛亮伝」』）とたしなめています。

このことばを聞いて「羽、飛すなわち止む」とありますから、よほど厳しい口調だったのでしょうか。「水魚之交」（水魚の交わり）には、お互いに生死をまかせ合う緊密さがこめられています。生涯にこんな友人を得られたら幸せですね。

いま経済発展のさなかにある中国では、企業側が事業を達成するために優れた人材を求めています。その真情の厚いことを示すのに「三顧茅（草）廬」がいられています。学生の側もそれに応えて能力を高めて職に就くことになります。



諸葛亮像

羽毛扇を手にして「隆中对（天下三分の計）」を説く孔明

「三顧茅廬」は様々なところで目にすることができます



連環画『三国演义』にも



寺院の門の壁面にも